## 地学ニュース（書評・紹介）

**上杉和央・小野映介：みわたす・つなげる地誌学**　古今書院，2023 年 1 月，120 ページ，B5 判，定価：2,640 円（税込），ISBN 978-4-7722-8122-5

地理学関連の大学講義において構成に難儀するのは，地誌学の科目ではないだろうか。特定の地域の地誌を扱う科目はともかく，地誌学概論のような科目となると教職課程の科目となっていることも多く，押さえるべき重要事項を網羅的に扱って全体をカバーする必要がある。しかし，実際のところ半期 14 回ないし 15 回という限られた講義時間で総合的に扱うためには，内容の濃淡やトピックの取捨選択などで講義内容を調整せざるを得ず，その調整がなかなか至難の業となる。

一方で受講する学生においても，地歴科の教職課程の科目を受講しているからといって必ずしも地理教員を志望しているわけではないうえ，（残念なことではあるが）地理が苦手だという人も多い。評者の経験からいえば，そのような学生は地理という科目を単なる暗記と捉えてしまっており，地理の重要さや面白さが理解できていないことがほとんどである。そして，そのような状況を助長してしまうのが，高校までの地理（地誌）と大学の地理学（地誌学）とのギャップにあるようだ。だからこそ，そのギャップの「橋渡し」があれば地理に関心をもつ学生も増えるのではないだろうかと評者も日頃感じていた。そのような教員と学生双方の悩みをみわたし，つなげて解決してくれる「痒い所に手が届く」ような書籍が本書である。

本書はその「みわたす・つなげる」をキーワードとして編纂された教科書シリーズ「みわつな地理」（編著者による命名）の 1 冊である。ここまで「みわたす･つなげる自然地理学」「みわたす･つなげる人文地理学」と 2 冊が出版されており，シリーズ 3 冊目が本書となる。本書は「地誌学」を扱うテキストであるため，歴史や文化，産業，経済，社会，そして自然や環境といった幅広い視点から，地域を読み解く示唆を与えてくれる内容となっている。先述した「橋渡し」に加えて，身近な事例を扱うことが意識されているので，学生としても関心をもちやすいのではないだろうか。一方で，網羅的に重要トピックを扱ってくれているので，教員側においても教科書や参考書として使用しやすいであろう。具体的な章構成は以下の通りである。

第 1 章　地誌学とは何か
第 2 章　京都を歩く―地誌学事始め
第 3 章　調査の方法―準備から道具，心構えまで
第 4 章　地図の見方・使い方
第 5 章　地域の描き方―地誌へのアプローチ
第 6 章　地域の個性―京都府宇治市
第 7 章　鉱工業都市―茨城県日立市
第 8 章　沿岸域をめぐる環境史―神奈川県川崎市川崎区旧大師河原村
第 9 章　雪と砂泥と共に生きる―青森県津軽平野
第 10 章　石に刻まれた地域らしさ―愛媛県西予市明浜町狩浜地区
第 11 章　世界遺産を地誌する―石見銀山（島根県大田市）
第 12 章　火山と共に生きる人々―有珠山周辺，北海道
第 13 章　「島」を考える―沖縄県北大東村
第 14 章　河川と共に生きる人々―ナイル川
第 15 章　フランス・ワインのテロワール
第 16 章　国土を造った人々―オランダ
第 17 章　産業集積の地誌―シリコンバレー今昔物語
第 18 章　アジア・大都市の発展と環境問題
第 19 章　ブラジルにおける自然環境の開発史
第 20 章　巨大ハリケーンに襲われた町―ニューオーリンズ，アメリカ合衆国

このような全 20 章の構成で，地誌学概論のような講義だけでなく，日本や海外の特定地域に関する地誌の講義にも対応できるようにしていることがわかる。それぞれ内容を概観してみると第 1 章から第 5 章については，地誌学の基本を扱う

概論的部分となっている。概論的部分であるので，地誌学の視点や考え方，データ収集の方法や読図などの研究・調査手法について書かれているのであるが，第5章は従来の地誌学関連のテキストにはあまり見られない，そして簡単なようでなかなか難しい地域の描き方（地誌の書き方）について触れる章となっている。この章は学生へ地誌学の重要性を伝える際に役立つだけでなく，研究者においても改めて自身の研究姿勢について確認・見直しをするヒントとなるであろう。

つづく第6章から第13章にかけては，日本地誌に関する部分である。日本地誌の各論であるからといって各地方の地誌を静態的に描いているわけではなく，それぞれ文化や景観，歴史，産業，自然といった要素を中心にして事例地域における地誌を描き出している。例えば，第10章は愛媛県西予市狩浜地区の事例であるが，段畑の石積みや家屋の礎石など地域の景観に見られる「石」をもとに自然環境や地場産業の変遷（地域の歴史）を捉えて，それらの上に成り立つ地域の個性や文化にまで記述を展開させている。これは，まさに「みわたす・つなげる」動態地誌の好例であるといえよう。

後半部である第14章から第20章については，外国地誌に充てられているのであるが，この部分は前段の日本地誌の海外バージョンである。扱う地域はエジプトからアメリカまで世界から可能な限りまんべんなく選出されており，地誌の軸となるトピックも自然環境からテロワール，産業集積，都市構造，災害など個性に富んでいる。それらに含まれる事例にはエジプトの世界遺産，フランスのワイン，シリコンバレーの半導体・ハイテク産業など海外の事例とはいえ，日本の学生にも比較的馴染みのある事項を選択しており，理解のしやすさという点においても工夫がなされている。

以上のように，本書は「みわたす・つなげる」ことを意識した動態地誌を描き出した，学生にとっても教員にとっても扱いやすい機能的な良書テキストなのであるが，唯一残念な点を挙げるとすれば，取り上げる事例の地域やスケール感における統一性にやや欠ける点ではないだろうか。それによってテキスト全体としてのストーリー性が少し見えにくくなっているように評者には感じられた。事項順に並べるか，地域順に並べた方がよかったのではないだろうか。それは，本書に通底するテーマである「みわたす・つなげる」という点を補強することにもなるであろう。とはいえ，いずれの章からも読み始めることができるという点においては支障がないし，取り上げる順序を変えて自由に授業構成できる利便性と捉えることもできる。そして，テキストとしてだけではなく，読み物としても楽しめる内容となっているので，地誌学科目の講義を担当する教員や，地歴科教職課程の学生含め地理学関係の科目を受講し始めた学部生には是非とも手に取ってもらいたい1冊であることは間違いない。

（飯塚　遼）

**◇新刊紹介◇**

**池田　碩：自然災害地**　古今書院，2023年12月，190ページ，B5判，定価：5,280円（税込），ISBN 978-4-7722-4235-6

**桑原啓三・上野将司・向山　栄：新版　空の旅の自然学**　古今書院，2024年1月，166ページ，B5判，定価：3,630円（税込），ISBN 978-4-7722-4234-9